

【論文】

ゴーゴリと「男らしさ」

— 『タラス・ブリーバ』の改作について

秦野一宏

1.

1835年の文集『ミールゴロド』において発表された『タラス・ブリーバ』は、大幅に手を加えられたのち、1842年のゴーゴリ選集第2巻に改めて収録された。その改作時期は『死せる魂』第一部の執筆時期と重なる（1839年8月から42年5月までの約3年）。当時のゴーゴリは『死せる魂』第一部において現代ロシアの墮落したすがたを描きつつ、同時にその復活・救いを考えていた。そうしなければ、どうしても筆がすすまないのである。最初は笑いとばしてそれですんでいたのだが、そのうちに何のためにこんなことを書くのか、その意味するところを確信していなければ強度の不安に襲われるようになる。大地にかかる単なる「重量」でしかないと酷評される人々、「蠅のように」ばたばた死んでゆく人間たち、人類のほころびとまで言われる吝嗇漢プリュージキン、自分というもののまるでない「どっちつかずの」マニーロフ、何のために死んだのやら、何のために生きたのやら分からないような濃い眉毛だけが特徴の検事—こうした生の価値の下落した世界、死せる魂たちの住む無意味な現代世界を見据え、それを詳細に描き続けるためには、同時にもう一方で価値ある生の存在を自分なりに確信する必要があった。彼の目は過去に向かう。状況は違っても、少なくとも価値ある生を生きたと信じることできた者たちがそこにいたのだと思うと、現代の地獄を書く意欲も湧いてくるというものだ。ゴーゴリは、滅びゆく英雄たちの声を書き記した自作『タラス・ブリーバ』を何度も読み返す。そこにはたしかに風が吹いている。ただししばらくすると、過去の風にあたるだけでは飽き足らなくなってくる。『死せる魂』を書きすすめるための明確な指針、あるいは未知の世界へ踏み込むための確たる地図がほしいが、それには過去の『タラス・ブリーバ』だけでは不十分である、改作がなされなければならない。

全部で9章からなっていた『タラス・ブーリバ』35年版は、42年版では3章増やされ、全体の分量はおよそ2倍に膨れ上がる。そこには新たなエピソードが加えられ、新たな登場人物たちも現れるけれども、大まかな出来事の流れにさしたる変更はない。学業を終えた息子のオスタップとアンドリイがキエフの神学大学からふるさどに戻ってくると、タラスは彼らをともなってザポロージェ・コサックの本営であるセーチへ赴く。息子たちとのセーチでの生活、コサックによるドゥブノ市包囲、ポーランド軍との戦闘。そのさなかで次男アンドリイは、キエフで暮らしていた時に会ったポーランド娘（ドゥブノ市の総督令嬢）と再会し、彼女のために祖国を裏切り、父親に銃殺されてしまう。一方長男オスタップはポーランド軍の捕虜になる。タラスはオスタップを救出するためにユダヤ人ヤンケリの力を借りてワルシャワに潜入するが失敗、最後には彼自身もポーランド軍に捕まって悲劇的な最後を迎えることになる。一両版ともに大筋はこんなところだ。

本質的な変更は出来事の流れではなく、登場人物の性格にある。両版を読み比べて何より目を引くのは、同胞のコサック軍を裏切ってポーランド軍の戦士となったアンドリイ像の変貌であろう。自軍を裏切ったという大本の事実は変わらないが、なぜ彼が裏切らねばならなかったのかという理由付けに微妙な変化がみられる。そしてその変化は、彼の愛したポーランドの総督令嬢像、さらには裏切りゆえに彼を我が手で殺すことになるタラス像の変化と連動している。

『タラス・ブーリバ』がウクライナ人民の民族解放闘争に捧げられた英雄詩であることをことさらに強調するエルミーロフ、フラプチェンコ、マシンスキイのような視点からすれば¹、どちらの版のアンドリイも単なる裏切り者で、それ以上のものではない。彼らからすればアンドリイは端役か、せいぜいが祖国の英雄ブーリバやオスタップの引き立て役にすぎない。とりわけアンドリイを軽薄だと酷評し、彼の全生涯を「くだらないもの」と見下すエルミーロフにとっては、アンドリイに関わる両版の異同等は端^{はな}から問題にならないが、そのような正と不正という安直な図式で細部を切り捨てる紋切型の解釈では、見えるはずのものも見えなくなるだろう²。

まず、父親のタラスによってアンドリイが撃ち殺される場面を取り上げてみ

よう。35年版のアンドリイは、ポーランド側に付いたあと、一口に言うとは臆病になっている。アンドリイの指揮する部隊はコサック軍を待ち伏せている。アンドリイは遠くに父親の姿を発見すると、全身震え始めたように見えた。彼は父親の姿に体がすくんでしまったのか、「卑劣な臆病者のように兵士たちの隊列の後ろに身を隠し、そこから自分の隊を指揮した³⁾」。「自分の魂がけがれないものとは必ずしも感じていなかったアンドリイの臆病さを大目に見てやるためには(…)彼[タラス]の[狂暴な]形相を見るだけでいい⁴⁾」。周りにいた味方のポーランド兵士たちはみなタラスの豪胆さに恐れをなし、部隊長であるアンドリイを見捨ててふがいなく逃げてゆく。当のアンドリイ自身も恐くなって、もう何もかも放り出して逃げたくなくなっている。彼は銃を投げ捨て、遁走する味方に「助けてくれ」と必死になって呼びかけるが、その姿はいかにも見苦しい。立ちだかる父親の前でもじたばたして、どうにも往生際が悪い。「絶望したアンドリイは逃げようと努力したが、もう遅い⁵⁾」。

42年版のアンドリイはもっと颯爽としている。彼は策を弄して待ち伏せなどせず、自らが先頭に立って「自分の道をきれいにし、[コサックたちを]なぎ倒してゆく⁶⁾」。父親の姿を発見しても、逃げようとはしない。この猪突猛進するアンドリイはひたすら令嬢のことだけを考え、もはや敵も味方も判断できない状態にある（「アンドリイには自分の前にいるのが誰か、味方なのか、それとも味方でない者なのか、見分けがつかなかった。彼は周りのものを何も見てやしなかった。彼は巻き髪を見ていた。あの巻き髪、長い長い巻き髪を、川辺の白鳥のような白い胸と雪のような首筋、肩、そして狂おしい接吻のために創られた全身を⁷⁾」。腕には令嬢の縫った肩帯が巻かれている。彼はおとぎ話の主人公のように、〈思い姫〉に値する騎士として認められること、伴侶としての権利を獲得することだけを願っている。コサック軍を打ち負かせば、娘と結婚するという手はずになっていたのだろう、ザポロージェ軍を追い払ったらすぐにも婚礼があると、令嬢の小間使いも話していた。

父親に対するアンドリイの畏怖の念は42年版では別な形で示されている。戦場で父が目の前に現れた時、アンドリイは「全身をおののかせて、突然真っ青になった」。この時のアンドリイの心中は長い比喻を通して次のように語られている。「自分の不注意で級友を怒らせ、その仕返しに定規で額をばちんとやられ

て烈火のごとくに怒り、狂乱して腰掛を蹴って跳び上がる、そしてその勢いに驚いた友人を、八つ裂きにしてやろうと追いかけてまわす、と突然、教室に入ってこようとした先生と鉢合わせになる。その瞬間、狂暴の発作はおさまり、つい先ほどの憤激も力なく消えてしまう。ちょうどこの生徒と同じように一瞬のうちにアンドリイの憤怒も、まるで何事もなかったかのように消えうせてしまった。そして彼は自分の前にただ一人、恐ろしい父親だけを見ていた⁸⁾。

—42年版のアンドリイは、35年版のアンドリイのように臆病風に吹かれたわけではない。突如頭から冷水をかけられたように、あるいは蛇に睨まれた蛙のようにとでも言えばよいのか、ただ父親という絶対的な権威の前で茫然自失の状態になっているだけだ。自身のとった行動を父親はけっして受け入れないことをアンドリイは知っていたが、自分の行為そのものが間違っているとは思っていない。罪の意識はない。彼は彼なりの価値尺度にしたがい、確信をもって行動しているのである。しかし、たとえ相容れないものであっても彼には、少し前まで自身のものでもあった父親の<正義>はわかりすぎるほどわかる。タラスが単一の価値しか認めないのに対し、アンドリイは相反する二つの価値を知っている。だからこそ彼は何の言い訳もすることなく(かすかに唇を動かしポーランド娘の名を呼んで)、「一言も口を開かないまま」無抵抗状態で父に撃たれるのだ。

アンドリイは『死せる魂』のマニーロフのような煮え切らない男ではない。たしかにアンドリイは正教からカトリックに乗り換えたけれども、それは彼がヴィノグラードフの言うような「どっちつかずの男」であったからでは毛頭ない⁹⁾。正教は、アンドリイにとって実際上仲間との結束力そのものにはなっていない。彼がセーチへの入所を許可される際にも、コサック隊長は「正教」を信じているかどうかの確認をほとんど儀礼的に行っているにすぎない。アンドリイにとっての選択肢は正教かカトリックかではなく、愛する娘という祖国かウクライナという祖国かである。42年版のアンドリイは祖国についてこんな言葉を吐く。「わたしの祖国がウクライナだと誰が言いましたか。誰がウクライナをわたしの祖国として与えたのですか。祖国とは我々の魂が捜し求めているもの、魂にとって何より愛^{いと}しいものなのです¹⁰⁾」。アンドリイは自分の意思で「魂の」祖国を選んだのである。言い換えれば、彼にとって祖国とは誰かに無

理強いされるものではなく、自由に選択しうるものなのだ。このような自由は常に境界内、「輪」の中にとどまるタラスやオスタップには到底考えられないことであるが、正教にもカトリックにも無縁で自由に国と国を往き来する拝金主義者のヤンケリには納得できる。拝金主義、すべてのものを交換可能にする貨幣へのこの執着心のおかげで、ヤンケリの境界に対する感覚は希薄になってしまっているのだ¹¹。42年版のヤンケリはアンドリイの行為に怒るタラスに向かい、個人の自由を盾にとつてこう反論している。「何でもまた殺すわけがありません。彼は自分の意思で по доброй воле お移りになられたのです。人に何の罪がございましょうか。あの方にはあちらがいいので、あちらに移られたのです¹²」。境界内にとどまり、公的な絶対的価値を信じつづけるタラス、オスタップと、境界を越え、恋という私的な絶対的価値を手にしたアンドリイ、そして境界そのものを超越して金銭という新たな絶対的価値だけを信じるに至ったヤンケリ。一三つの生がそれぞれにある種の巨大な力、情熱に突き動かされていることを42年版は示唆している。『死せる魂』を執筆しつつあるゴーゴリは、このように<巨大な力>のもつ意味を問い、その力を生の改革にどのように転換できるかを考えつづけていた。

2.

アンドリイ像の変化はポーランド娘の像の変化と呼応する。アンドリイと最初のキエフでの出会いの場面では、両版ともに令嬢の性格はまったく変わっていない。無邪気でお転婆な彼女は朴訥なアンドリイを自分の部屋に呼び寄せ、彼に女装させておもしろがっている。問題になるのは、ドゥブノでの再会の時である。コサック軍はポーランド軍と戦い、敵の拠点であるドゥブノ市を兵糧攻めにするが、その戦闘時にアンドレイをみかけた総督令嬢は小間使いを遣って彼に助けを求めた。アンドレイは仲間の目を盗んでパンの袋をいくつも背負い、小間使いに案内させて暗い地下道を通り、令嬢のもとまでやってくる。

35年版では、彼女は自身の寝室にいたが、「魅惑的な、均整のとれた足 ножка を自分の方に折り曲げて、ソファーに座っていた。(…)物音を聞きつれると、彼女は少し頭を上げ、彼に長い強烈な視線をむけた¹³」。ヴァイスコプフの指摘するとおり、このようなポーズで出迎える女は通常、ゴーゴリにあっては悪魔的

な存在である¹⁴(特に足に関しては、『ヴィイ』のミキータを虜にし、破滅させる魔女の「むきだしの、むっちりとした、白い足 ножка」を想起こさせる)。言い換えれば、35年版の総督令嬢は、アンドリイの前に誘惑者として立ち現われる。35年版のアンドリイは令嬢(=魔女)に誘惑され、道を踏み迷い、コサツ的な「男らしさ」「豪胆さ」も失ってしまっている。だからこそ父親の前に立つと気もそぞろ、臆病風に吹かれるのである。42年版の令嬢は相手の気を引くような格好でソファーに座ってもいないし、意味ありげな「強烈な視線」を投げかけもしない。もちろんかわいらしい「足」にも言及はない。完全に脱・悪魔化している。ゴゴリにあっては「女性」は一方で、男を屍にしてしまうほどの情熱を燃え上がらせる妖婆であり(ミキータは魔女である百人長の娘に惚れ込んで「一山の灰」となった)、もう一方では、男をナイトにする気高い存在である。35年版から42年版への総督令嬢の変貌はこの「女性」の二つの側面を浮き彫りにし、かつ、その力点の変化を窺わせるものである。のちに『友人との往復書簡抜萃』(1847年)において、ゴゴリは「女性」の高貴な力を道徳的な頹廢に陥った男たちの変革に利用できる、女性の美は男たちの干からびた魂を再教育する力となりうるのだと改めて強調するようになる(第2章「上流社会の婦人」)。未完に終わった『死せる魂』第2部では、のらくら者のテンテニコフを救うためにウリニカという「すばらしいロシア娘」を送りこみもした¹⁵。

出迎いのポーズだけではない、再会した時の両版の令嬢は性格的にもほとんど別人の観がある。35年版と異なり、42年版では令嬢は自分のためにパンを与えてくれるように頼んでいない。彼女は自分の年老いた母親が飢えて目の前で死んでゆくのが辛いから、助けてくれと言う。「あの方にもやはりお年を召したお母様がおありのはずだから、その人の後生のためにもパンを恵んでくださるように¹⁶」と彼女は小間使いに言づてをする。35年版の言づては、自分が二日も何も食べてないといった事情をすべて隠さず話してくれ、彼は「自分を裏切りたいとは思わないだろうから¹⁷」というものだった。一明らかにこちらは、相手を虜にする自分の魅力を意識して、それを武器にしている。35年版のアンドリイはこの「裏切る」という言葉に強く反応し、彼女に会いに行くことをすぐさま決意した。42年版では、令嬢は自分への裏切りではなく彼が祖国を裏切ることになることを気遣い、アンドリイがもってきたパンを手にした時も、自分

のことは措いて、まず母親に食べさせたかどうかを小間使いに尋ねている。子どもが母親を気遣う気持ちには、民族の違いも、また正教もカトリックも関係がない。42年版の令嬢はその共通の感情に訴えて、助けをこうているのである。一方、タラスやオスタップが価値を置いている関係はあくまで仲間内だけのものであり、限られた共同体でしか発展し得ないものである。そしてこの〈仲間〉に女性は入ることはできない。—コサックは女 баба と関わってはならない、女には何もわからない。女どもに関わりあっていると、ろくでもないことになると、タラスは繰り返して強調する（両版共通）。「このサーベルこそがおまえたらの母親なのだ」（両版共通）というタラスの言葉は、男性的なものや女性的なものに対するコサックとしての彼の見方を如実に語っている。このようなタラス（コサックたち）のもつ狭い、否定的な女性観を逆照射する点で、42年版で付け加えられた次のような、総督令嬢の悲しげな声を描写した一節は極めて意味深いものである。「それは美しい夕べにさっと吹き起こった風が、岸辺に密生した葦の茂みを不意に通り過ぎてゆく時にも似ていた。悲しげな響きが突然さらさらと音をたて、ざわざわと鳴りはじめて、それが一面に伝わってゆくと、歩みをとめた旅人は、たそがれてゆく光にも、野良仕事や取り入れから家路をたどる人々の陽気な歌声の流れにも、また一タ暮れ時のふとしたもの思いをもたらす—どこか遠くを過ぎ行く荷馬車のごとく走る音にも気づかずに、不可思議な哀愁を抱いてその悲しげな響きに聞き入るのだ¹⁸⁾」。運命を嘆くその言葉からにじみ出る恋人へのいとおいしさ、せつない思い、老いた母への思いやり、そういった自ずから湧き出る愛情が、美しい心なごませる自然の情景、さらには民衆の生活、歌と結びつく。35年版のアンドリイは令嬢に「父も兄も、母も、祖国もこの世にある何もかもあなたのために手放せる¹⁹⁾」と豪語するが、42年版では「母」への言及がすつぽりと抜け落ちている。「わたしにとって父が、友が、祖国がいったい何だというのですか²⁰⁾」。—このように話すアンドリイの意識の中では、母への愛は令嬢への愛と同じく前提ぬきの無条件なものであり、特殊な結束を促す男性的な祖国愛とは明らかに切り離されているのである。

コサックたちには何より男同士の「友愛」が大切で、アンドリイと令嬢のような愛のドラマは、それに比べればほとんど価値がない。というよりもむしろ、女性との、あるいは母親との愛のドラマを断ち切るところにこそ、コサックの

美学がある。文集『アラベスキ』に収められた「小ロシアの歌謡について」と題された小文の中でゴゴリはコサックの代表的な歌謡を紹介し、次のように記していた。「…彼（コサック）の駿馬に取りすがるとび色の目をした、みずみずしさに燃え上がる眉の黒い女友達も、涙を川のように流す老いた母親も…、何も彼を留める力はない。頑固で不屈の彼はステップへ、仲間のコサック集団の元へと急ぐ。妻、母、妹、兄弟たちも、襲撃の騎士の一団に取り替えられる。この友愛の絆が彼には何より、愛よりも高いものなのだ²¹」。仲間の一体性、結束力を作り出すものとしての男たちの固い友情（タワーリシチ）こそコサックの最高の価値であり、セーチでは「女性崇拜者」は何も見出すものがなく、軟弱者として排斥される。これも42年版になって書き加えられたものだが、闘いの最中、支営隊長のボロダートゥイは「利欲」に目が眩んで敵軍の死体から甲冑を剥ぎ取ろうとした。彼は財布を帯から解き放ち、さらに平然として「愛のしるしとして大切に保存されていた」少女の巻き毛の入った袋を胸から取り外す。一敵の死体はモノであり、モノに人間的な感情は抱くことはない。あるいはタラスに率いられたコサックたちは、幼子たちを街路から槍先にかけてきては、女たちを焼き殺した炎のなかにその子どもたちを投げ込む。「盟友の信義 товарищество」の名のもとに、彼らは戦士でない母と子どもたちを焼き殺すのだ²²。相手が戦士であろうがなかろうが、敵はあくまでも敵であり、それ以上想像力の働く余地はない。彼らに見えるのは自分たちと同じように喜怒哀楽をもって生活する生きた個人ではなく、集団、それも悪意をもって攻撃をしかけてくる卑劣な「犬の」集団だけである。もちろん、オスタップたちの処刑に見られるように、イデーを固く信じる者の残酷さはこちら側と向こう側、双方共通のものではあるのだが。

また、42年版で加えられたコサック、モシー・シーロのエピソードも興味ぶかい。この男は平和な時には飲んだくれで、仲間にも借金するばかりか平然と仲間のを掠め取るこそ泥なのだが、ひとたび戦いがはじまると、仲間を救い出す知恵も出、並はずれた大きな力を発揮して英雄として称えられる一人になる。ザポロージェ・コサックたちの「英雄」物語の中で追求される最大の価値は、どこまでも戦闘時における行動が規準になっており、その他の時空での行動は無意味とまでは言わないが、たいていが人物そのものを判断するには至ら

ない、きわめて軽いものと見なされている。

3.

42年版になると、アンドレイ、令嬢のみならず、タラスの像も大きく変貌を遂げる。

ただ、その変化を見る前に、まず両版に共通するタラス像を見ておこう。「重苦しい15世紀、ヨーロッパの半遊牧的な片隅にだけ発生した」という「おそろしく頑固な」タラスの性格は三つの異なる状況で示されている。すなわち、家庭生活、戦場（あるいは戦争の準備をするセーチでの生活）、さらには仲間のまったくくない孤立した状況で。タラスは家庭生活では、少しでも気に入らないことがあるとすぐに怒号し、物を壊すわがままな暴力亭主にすぎない。彼はオスタップ救出のためにユダヤ人ヤンケリと共にワルシャワに向かうが、途中ユダヤ人街に潜んでいる時には、セーチや家では体験したことのないことのない不安におそわれる。「彼は奇妙な、今まで経験したことがないような心境になり、生まれて初めて不安を感じた。彼の心は熱に浮かされて震えているような状態にあった。今の彼は、以前のような不撓不屈の樫の木のような頑強なコサックではなく、小心翼翼とした弱々しい人間になっていた²³」（両版共通）。戦場で、あるいはコサック仲間とすごす時には、「樫の木」のような強い男で、頑固なその力を「豪胆さ」「男らしさ мужество」として十二分に発揮できる英雄が、ここではなんと臆病風に吹かれるのである。

戦場で見せる彼の「男らしさ」についてもひと言注釈が必要である。昔、明治期に『タラス・ブーリバ』という題名を「蛮勇」と訳した翻訳があった²⁴が、この蛮勇という言葉がタラスやザポロージェ・コサックたちの「男らしさ」をよく示している。じっさいこの「男らしい」行為には裏切り者への制裁、復讐といった彼らなりの大義名分があるとはいえ、自身の息子を殺したり、乳房を抉り取ったり、生皮を剥ぎとったりするなど、のちの時代に生きる人間には理解しがたいほどの残酷な側面があるのだ（「今日の人が見れば、身の毛もよだつ思いがするだろう」-42年版）。ちなみに35年版ではザポロージェ・コサックの狂暴さは「彼らのアジア的な攻撃」と記されているだけであった。興味深いのは中間的なヴァリエーションで、ここでは乳房の切り取り、生皮剥ぎなどの残酷な行為

が「半未開の世紀に現れえたその悪事 злодейство のしるし」として、すなわち許容できない絶対的な悪として説明されている²⁵。作者自身も、そんな時代だったと言ってすまされないタラスたちの「男らしい」残虐さに、ある種の戸惑いを感じていたのだ。

家庭生活におけるブーリバ、戦場で友とともに戦うブーリバ、よそ者としての孤独なブーリバ-この三つのブーリバ像は時として重なることもある。たとえば父親としてのブーリバはどうだろう。

35年版のタラスには、親であるが故の弱さ、あるいはやさしさ、人間臭さがある。息子オスタップが目の前で敵の捕虜になるのを見て、タラスは動揺する。「愛する息子に救いの手を差し伸べ、彼を解放してやろうとする望みがタラスに自分のいる立場の重大さを忘れさせた²⁶」。その結果、統率する者のいなくなった彼の部隊は敵に付け入る隙を与え、同志に多くの犠牲者が出た。また自身の手で殺したアンドロイの死体を前にすると、いかに相手が裏切り者だとはいえ、やはり「親」として胸に「ツンとこみ上げてくるもの подступавшее едкое чувство」がある²⁷。ブーリバは穴を掘ってわが子を葬ってやりさえする。その思いは兄のオスタップも変わらない。オスタップはある種「無言の非難」の表情を浮かべていた。彼は「20年いっしょに育ってきた、そして何もかも半々で生きてきた同志、同伴者を抱きしめるために身を投げだした²⁸」。そこにはく私的な>親子、兄弟の情愛がほのみえる。ところが42年版になると、オスタップが捕まったからといって、タラスはけっして自身の任務を忘れてはしない。またタラスのアンドロイに対する情愛の念もまったく異質なものになっている。「勇敢な騎士なら、たとえどんな奴だろうと尊敬しなければならんはずだ²⁹」と彼は言うが、この言葉は親としての感情のこもったもの、個人的なものではなく、騎士道に則った普遍的な真理として語られている。42年版のオスタップはもう父を批判的に見ることはない、ただ「かわいそうになって」、弟を埋めてやりましょうと声をかけるだけだ。「何をしたのですか、お父さん」とは言うけれど、オスタップは父の行為を非道であると非難しているわけではない。すくなくともそのような調子はやわらげられている。タラスはオスタップを溺愛しているけれど、彼にもし女の子もたちがいたら、彼は彼女たちを愛さないで軽蔑したことだろう。彼はわが子でさえ条件付きでしか愛せないのだ。

「もし子どもが騎士に役立たないのであれば、人間の中で何がよいものなのか、彼にはけっして理解できない³⁰⁾」とベリンスキイは35年版のタラスについて述べているが、この言葉はむしろ、42年版のタラスのほうにいつそうよく当てはまるのではないか。

注目すべきは、〈父〉としての感情が実の息子であるアンドリイではなく、他の勇敢なコサックたちに注がれるようになる点だ。死を前にしたコサックたちは、「親父 *батько*」であるプーリバの顔を見ずに死ぬのはいやだと訴えた。伝令は言う。「最後を遂げる前に、あんたが一目だけでも見届けてくれるようにと、一同は望んでいます³¹⁾」と。タラスはアンドリイの死体を埋めるどころか、土をふりかけてやることもせず、大鴉や鷲にあとの始末をまかせ、〈子〉であるコサックたちに〈父〉としての励ましの言葉をかけにゆく。個人の父親から、同志たち全体の父親への明確な移行が42年版には見られる。42年版のオスタップにとってタラスとは、血でつながった父というよりも、他のコサックたちと同じ精神的支柱としての、括弧つきの〈父〉である。処刑台のオスタップは苦痛に耐えていたが、最後の最後にくじけそうになる。そしてたまたま「親父さん *батько*」と叫ぶわけだが、35年版ではその場面で、恐ろしい苦痛を与える道具が具体的に示されている。「血管を引っ張り出そうとする新しい地獄的な道具を見た時、彼の唇は震え始めた³²⁾」。一方、42年版ではオスタップがくじけそうになるのは、恐ろしい処刑の道具を目にしたためではなく、苦痛を、「この世に起こるすべてのことを鼻をほじりながら見物する」ような無関心な人々、見知らぬ人たちの中で耐えなければならないということに由来する³³⁾。憎悪の感情をあらわにした視線に晒されれば毅然として立ち向かい、気持ちを奮い立たせることもできるのだが、無関心に対してはなすすべがない。無関心はオスタップが耐えなければならない死の経験、痛みを無意味化する。42年版のオスタップが望むのは、悲嘆にくれる母や妻ではない。彼女たちの〈弱さ〉は彼の「精神の衰弱」には役に立たない。必要なのは「理性的な言葉で」彼を新たにし、末期にあつて、自身の勇敢さ、豪胆さを認めてくれる「不屈の男性」である。同志として、勇敢な自身の姿を認め、力強く励ましてくれる者、死に確固とした意味を付与してくれる〈父〉である。

宗教の違いや闘争とはまったくかかわらない無関心層はウクライナの中でも

増大しつつある。この新しい勢力はタラスやオスタップに代表されるコサックたちの世界はもちろん、アンドレイの世界すら侵食してゆく。「白髯を垂れた」琵琶法師（バンドゥリスト）たちが武人たちの傍らで、彼らのたてた勲功をほめたたえ、彼らの栄光を「力強い言葉」で語り継いでくれていた時代は、もう終わろうとしている。コサックたちは後世にまで伝えられるであろうその「言葉」、未来に残される記憶を信じることで、自身の死を価値あるものとして受け容れることができたのであったが。

ゴーゴリは現代において新たな「父」の像（あるいは教師の像—ゴーゴリにあっては二つは結びついている）を模索している。たとえば『死せる魂』第2部には義務の遂行を求め、父親的、教師的な「励ましの言葉」をはくムラーゾフが登場する。「この世の人間には果たさなければならないある種の義務がある。至るところで、どんな片隅にあっても、境遇がどうあろうとも、(…)果たすべき義務があることを、彼(チーチコフ)の本性は漠然とではあるが感じ始めたようであった³⁴⁾」云々。彼の励ましの言葉によって、チーチコフは改心しそうになる。おそらく時代錯誤であることは承知の上で、ゴーゴリは〈現代〉にもタラスのようなく父〉を見いだそうとしていたのである。タラスのような父を呼び戻すこと、そのことが人々を救済する大いなる手段だと考えたのである。

35年版のタラスには英雄の型には納まりがたい、人間臭いところが多く見受けられた。情がからんでタラスが戦いの最中にへまをすることについてはすでに触れたが、ポーランド軍・コサック軍の連合軍でタタールから分捕った戦利品が平等に分配されなかったという理由で、「連隊長たち」とけんかもする。その怒りはおさまらず、「わしから分捕る奴には思い知らせてやる」と宣言すると、実際にしばらくの間、自分の父親の領地からかなりの人数を集め、部隊を組織しさえした。42年版のタラスはこのようなコサックの規則を無視した個人的な行動をけってとらない。42年版では自らを「正教の合法的な擁護者」であると見なしてロシアへの愛国主義的な呼びかけを行い、盟友の信義についても長広舌を振う。『ゴーゴリ 7 巻選集』の注釈者（マシンスキイ）はこうしたことを論拠にして、42年版になるとタラスは「社会的により意味深くなり、心理的には一貫してくる」と指摘している³⁵⁾。たしかにその通りにちがいないのだが、指揮官としてくりっばな衣服〉を着せられるようになったその反面、自由—い

っさいの束縛からの解放—のテーマが薄らいだことも確かである。

雁、白鳥、鷺、鷹、かもめ—ステップの上空をのびやかに遊泳する鳥たち、あるいは道路の真っ只中に両手両足を投げ出し、「ライオンが寝そべっているように」大の字になって眠り込んでいるザポロージェ・コサックの姿は、両版に共通する自由のシンボルである。さらに35年版の原稿には、42年版にはない、自由と陶醉を結びつけるこんな主張があった。「ただ音楽のなかにあってこそ、人は自由(воля)なのだ。人はどこでも枷をはめられている。人は社会や、生がほんの少し触れるだけの権力が彼にいたるところで当てがっている枷よりずっと重たいものを自身で、みずからはめている。人は奴隷だ、しかし、狂乱の踊りの中で(その踊りにおいては、彼の魂は肉体のことを心配せず、永遠に楽しもうと、自由な跳躍によって舞い上がる)われを失ってはじめて人は自由なのである³⁶⁾。ニーチェ(『悲劇の誕生』)のディオニュソス礼讃を思わせる一節であるが、統一、調和をめざそうとすればするほど、このような自己忘却、「魂の宴」を求める根源的欲求は抑圧されざるをえなくなる。1846年から51年の間に書かれたメモの中で、ゴゴリはどうしてキリスト教が他の宗教よりすぐれているのかと自問し、それはキリスト教には「内的な法」があるからだと答えているが、彼にとって無制限の自由は次第に危険なものだと思えてきたのである。晩年のゴゴリは自由より「合法的境界 законные границы」という概念を強調するようになってきており、正教会もその観点から捉えられることになる(「教会は我々のすべての階級、身分、職務をそれらの合法的境界内に入れ込ませる³⁷⁾。『タラス・ブーリバ』の改作はその考え方の道筋を示すものである。

4.

『タラス・ブーリバ』と『恐ろしい復讐』(1832)の時代状況、設定はよく似ている。タラスに相当するのは『恐ろしい復讐』ではザポロージェ・コサックのダニーロであるが、彼は何もかもすっかり変ってしまった、自分たちの「黄金時代」はもはやすぎてしまったのだと感じている。—今のウクライナは乱れ、もう元に戻ることもない。ダニーロは「なすこともなく日を送り、自分自身何のために生きとるのか分からない³⁸⁾。彼は妻に嘆いて言う。「わたらの貴族は

すっかりポーランドの習わしを取り入れ、ずる賢さを学び…、宗教合同を受け入れ、魂を売り渡してしまった。ユダヤ人が貧しい民を虐げている。おお、時よ、時よ、過ぎ去った時よ³⁹⁾云々。ポーランドの習慣(『恐ろしい復讐』ではポーランド側に付いた舅は、「火酒ゴレールカ」の代わりに「なにか黒い水のようなもの」を飲んでいて)、宗教合同、ユダヤ人の進出—これら三つの問題はみな、35年版の『タラス・ブーリバ』においても取り上げられている。「宗教合同 уния」とは1596年、ポーランドの支配下で正教司祭たちが礼拝や儀式は東方系、教会規律の精神の上ではローマ教皇の首長権を認めることを決議したブレスト教会合同のことを指す。タラスたちはこの宗教合同を父祖伝来の信仰への侮辱、教会へ冒瀆とみなし、いっせいに蜂起した(35年版ではその人数は3万人、42年版では12万人となっているが、このような数の増大は42年版の特徴である)。ここではさらに、宗教とはかかわらないポーランドの問題とユダヤ人の進出の問題について考えてみたい。

『タラス・ブーリバ』におけるポーランド問題は単にポーランドだけの問題ではない。ポーランドの背後にはヨーロッパが見え隠れしている。ポーランドへはヨーロッパの伯爵、男爵が好奇心をもって訪れるが、ヨーロッパの人間からすれば、ポーランドとは「半アジア的なヨーロッパの片隅」であり、ウクライナ、モスクワ地方は「アジアに属している」。ポーランドとの戦いにおいても、ポーランド側には技術顧問としてのフランス人の砲術師がいる。42年版ではこのポーランド(ヨーロッパ)の影響力がいっそう強調されている。ここでは、ポーランド軍は、圧倒的な技術力の差を示す「コサックたちの中で誰一人見たこともないような大砲」をもっていると記されるようになる。ポーランド兵たちはまだこの「見たこともない大砲」を使いこなせないでいるが、ひとたびフランス人の顧問が自身の手で素に点火すると、「ネザマイコフスキ支隊の半数はまるで初めから存在しなかったように消えうせてしまった⁴⁰⁾」。また第1章にはこんな記述が付加されている。「当時はもうポーランドの影響が、ロシアの貴族に影響を与えはじめていた頃である。多くの者がすでにポーランドの風習を真似て、ぜいたく品や、あでやかな召使や、鷹や、狩猟係や、午餐会や、屋敷などを取り込んでいた⁴¹⁾(ポーランド側に移ったアンドリイの軍服も黄金で飾り付けられている)。コサックたちの「素朴な生活 простая жизнь」を愛するタラ

スにはこのような華美なものは気に入らない。コサックたちの生活は質素だが、ポーランドに影響された貴族とは違ったおおらかさがあり、たとえばそれは悠然と曠野を舞う鷹に象徴される。ちなみに、ポーランドにも鷹はいるが、こちらの鷹はバルコニーに吊り下げられた「黄金の籠」に閉じ込められており、そこから見物客といっしょにオスタップたちが処刑されるのを眺めている(両版ともに共通)。

ポーランドの問題は、華美な生活と「素朴な生活」といった表面的な対比だけで片付くものではない。ポーランド、あるいは西欧は一方向的にコサックたちに影響を与えるのではなく、逆にコサックの「素朴さ」に反応する力も兼ね備えていると見なされるようになる。

この問題の中心にいるのは42年版のアンドレイである。ポーランドの令嬢にパンを届けた時、アンドレイは彼女から心のこもった感謝の言葉を受けとるのだが、その言葉に対してうまく答えることができない。「彼は自分のように神学校の寄宿舎と戦の流浪生活の中で育ってきた者には、あのような[令嬢の]言葉に答える資格がないのだと感じて、自分のコサック気質を呪わしく思った⁴²」。「彼は心の中にあるものを残らず口に出したかった。一心の中に燃え立っているすべてのことを、同じように燃え立つ言葉で口に出したかったのだが、できはしなかった⁴³」。しかし、どうしてもこの感激と感動を伝えたいという思いにかられ、奔流に押し流されるように話しはじめた時、令嬢は彼のぶこつな「率直な熱情あふれる言葉」に聞き入った。「素朴な一語一語」には非常な力がこもっており、言葉の中には「魂」が反映していた。彼女はかつてポーランドの有数の貴族や最も富裕な紳士、外国の男爵たちに引き合わせられたことがあったが、彼らの<優美な、品のある>言葉が彼女の心に染み入ることは一度もなかったのだ。一令嬢の言葉はアンドレイを感動させ、アンドレイの言葉は令嬢の胸をうつ。ここには35年版にはない、ポーランドの繊細で気品ある言葉とコサックのぶこつで素朴な言葉の出会いがある。ポーランド(西欧)とウクライナ(ロシア)の精神の交流がある。

次にユダヤ人の進出についてはどうか。彼らの力の拡大は、例えば次のような記述から窺うことができる。「今では教会もみな、ユダヤ人どものところで抵当に入っているんだ。それであらかじめユダヤ人に借金を返さんことには、ミ

サもできないという始末だ⁴⁴⁾(ザポロージェに助けを求めにきたよそのコサックの言。42年版第4章)。ユダヤ人を代表するのはヤンケリであるが、彼の力は42年版になると恐ろしく増大する。金儲けにとりつかれたその姿はもう狂信者といってもいいレベルにまで達している。大勢の仲間がザポロージェたちに殺された直後、自分も命拾いしたそのすぐあとで、命の危険をも顧みずにヤンケリはもう店を開いて金儲けに精を出している。35年版の彼はウーマニで「何か請け負い仕事のようなことをやり、当地のアレンダートル(借地小作雇主)と結びついていた⁴⁵⁾」だけだが、42年版になると、ウーマニに根をおろし、自身がアレンダートルになって、居酒屋の主人も兼ねている。「7キロ以内のところには、ちゃんとした百姓小屋が一軒も残っておらず(…)まるで火事かペストに襲われたあとのように、あたり一帯ががらんとしてしまった。たぶんヤンケリがあと10年もここに住みついていたら、軍管区全体が荒廃し、がらんとしてしまったことであろう⁴⁶⁾」。コサックについては「アレンダートルであるユダヤ人のおかげで、何かを落つことす心配など何もいらずに、ポケットを裏返すことのできた」者がザポロージェのセーチにいたことが示されている(両版共通)。42年版では、「大勢のザポロージェ・コサックがユダヤ人の居酒屋どもや、自分の仲間たちに、今ではほんとうに信じられないくらい大きな借金を背負っている⁴⁷⁾」と、ユダヤ人の金力に屈服する者が大勢いたことが知らされている。また42年版になると、ヤンケリたち、ユダヤ人が金儲けの対象にしているのは、コサックだけではないことが強調されるようになる。イツカ、ラフーム、サムイロ、ハイアローフと、ポーランドにいるユダヤ・アレンダートルの仲間たちの名をヤンケリは誇らしげに並べあげるが、彼らの力は絶大で、戦争そのものもユダヤ人たちがいなければ成立しないというなさけない有様である。「…今度もブレスラーブリのユダヤ人たちが武装をさせてあげなかったら、戦争に出かけようにも、何ひとつなかったそうでございます⁴⁸⁾」。圧倒的な金力の前ではもはやポーランドもウクライナもなすすべがないのだ。そしてこのような金力の支配は金以外のものを軽視する風潮を招き、結果的に、伝統的な価値に対して人々を「無関心」にしてゆくことになる。人々は何のために戦っているのか、何のために死んでゆくのか、よく分からなくなってくる。

『タラス・ブーリバ』を改作中のゴゴリが何より関心をもっていたのはこ

の戦いの意味、死の意味である。35年版では、コサックたちは自分たちの死をできるかぎり「高く売りつけ」ようとした。死をどのように迎えるべきか、42年版のプーリバは仲間のコサックたちにこう問いかけている。女の寝床で死ぬのか、犬猫のように居酒屋でくたばるのか、それとも、みんないっしょに、花婿と花嫁が抱き合うように死ぬのか、どっちなのだと。曠野一帯が血にまみれ、コサックたちの白骨によっておおわれようとも、その広大な死の床にこそ「偉大な宝」が残されているのだと42年版の語り手は言う。—花嫁と花婿が抱き合うような死に方、「盟友の信義」に裏打ちされたような「偉大な」死に方は果たして<現代>において可能なのか⁴⁹。もはや敵が「ポーランド」というようなかたちで明確に示せなくなった時、そもそも何に対して戦えばよいのか、価値ある死を迎えるためにはどうすればよいのか。ゴーゴリは、<現代人>もまたコサックたちのように戦士であるべきだという認識の下、コサック集団の出現した危機的な、いつ破滅してしまうかわからない時代状況を<現代>に重ね合わせた。『友人との往復書簡抜萃』第30章「はなむけの言葉」にはこう記されている。—「我々がこの世に召し出されたのは、お祭りや酒宴のためではけっしてない。戦いのために我々はここに招集されたのだ。勝利は向こうで祝うことにしよう。(…)勇敢な戦士として、我々の誰もが戦いの少しでも激しいところへ突進していかねばならぬ。我々はみな、天上から天の司令官に見守られている⁵⁰」。戦いの相手はかつてのタタールやポーランドのような目に見える敵ではなく、内なる「悪魔」あるいは悪魔が操る「無意志症」、人々のくわびしさ *скука* > や <無関心> である。それはまさに処刑されるオスタップを呑みこもうとしたものであり、ヤンケリたち拝金主義者の増殖によって蔓延したものである。ひと言でいうと、この戦いは、英雄的な価値そのものを求める戦いであり、『タラス・プーリバ』改作におけるプーリバやアンドレイの姿の変貌は、その価値追求の過程を示すものでもあった。そしていつしか戦いそのものが価値になる、戦いそのもののなかに「偉大さ」があり、「功績」があるのだ、ということになる。文脈は変わるが、<現代>に立ち向かうこの勇敢な、<男らしい>戦いのイメージ、—その確固としたイメージをゴーゴリはおそらくこの『タラス・プーリバ』の改作を行いながら作り上げたのであろう⁵¹。

- 1 以下の文献を参照。エルミーロフ、奥澤三郎訳『ゴゴリ研究』（未来社、1955年）。Храпченко М.В. Николай Гоголь. М., 1984. Машинский С. Художественный мир Гоголя. М., 1979.
- 2 エルミーロフ『ゴゴリ研究』、115頁を参照。エルミーロフによればブーリバやオスタップはアンドリイとは異なり、「自己の荣誉ある生涯を幸福に終えた」（同頁）。
- 3 Гоголь Н.В. Полное собрание сочинений в 14 томах. Л., 1937-1952. Т.2. С.321. (本全集を『ゴゴリ 14 卷全集』と略記する)。
- 4 Там же. 下線は筆者のもの。以下同じ。
- 5 Там же.
- 6 『ゴゴリ 14 卷全集』第2巻、142頁。
- 7 同上、142-143頁。
- 8 同上、143頁。このようなある種のストーリー性をもった長い比喩が42年版の『タラス・ブーリバ』や『死せる魂』に多く見られる。ある場面を、通常ならば比べるのがためられるような次元の違う場面と付き合わせる。その結果、双方の場面全体をニュアンス含みとなる。スケールの大きい比喩である。
- 9 Виноградов И.А. ГОГОЛЬ - ХУДОЖНИК И МЫСЛИТЕЛЬ: Христианские основы мирозосерцания. М., 2000. С.196-197.
- 10 『ゴゴリ 14 卷全集』第2巻、106頁
- 11 黄金以外のものは相対化でき、その点ではある種の自由をもつといえるが、骨の髄まで黄金の奴隷であるという点から見れば、ヤンケリほど不自由で縛られた人間はいない。
- 12 『ゴゴリ 14 卷全集』第2巻、113頁。
- 13 同上、317頁。
- 14 Вайскопф М. Сюжет Гоголя. М., 1993. С.449. ヴァイスコフによれば、このポーズは『降誕祭の前夜』『外套』『ネフスキ大通り』などで示される誘惑的ポーズの一種である。
- 15 ゴゴリの朗読を聴いた人々の回想によれば、ウリニカはシベリア流刑になったテンテニコフに付き添い、ひたむきな献身によって彼に決定的な影響を与える。彼女はまさに男たちに「前進！」という魔法の言葉をかける女性である。
- 16 『ゴゴリ 14 卷全集』第2巻、90頁。
- 17 同上、315頁。
- 18 同上、104頁。この場面の比喩は、注8で触れたものと同種のものである。
- 19 同上、318頁。
- 20 同上、106頁
- 21 『ゴゴリ 14 卷全集』第8巻、91頁。
- 22 このような男性の英雄的行為の残酷さにふれて、ドラゴミレーツカヤは女性の視点から辛辣に述べている。「我々はどのような一面性の助けを借りて(…)英雄的なものが肯定されているかを忘れない」と(Драгомирецкая Н.В. Стилевая иерархия как принцип формы - В кн.: Смена литературных стилей. М., 1974. 277)。
- 23 『ゴゴリ 14 卷全集』第2巻、156、340頁。
- 24 塚原洪祐・柴田流星共訳『蛮勇』新声社、明治36年。ちなみに徳富蘆花は『老武者』と訳している(明治28年「国民新聞」)。
- 25 『ゴゴリ 14 卷全集』第2巻、369頁。
- 26 同上、331頁
- 27 同上、322頁。
- 28 同上。

- 29 『ゴーゴリ 14 巻全集』第 2 巻、144-145 頁。
- 30 Белинский В.Г. Собрание сочинений в 9 томах. М.,1977. С.200.
- 31 『ゴーゴリ 14 巻全集』第 2 巻、145 頁。
- 32 同上、348-349 頁。
- 33 無関心な者たちのおそろしく冷たい視線は、次のような見物客の言葉からも窺える。「車裂きの刑とかいろんな拷問をしているあいだは、罪人はまだ生きてるんだけどね、首をはねられてしまうと、ねえきみ、すぐに死んじゃうんだよ。それまでは叫んだり、動いたりしているんだが、首をはねられると、叫びもできないし、食べることも飲むこともできなくなるんだ。ねえきみ、もう首がなくなっているんだからね」。話し手の恋人のユズイシャは「恐怖と好奇心をもって」これらの言葉を聞いていた（同上、165 頁）。
- 34 『ゴーゴリ 14 巻全集』第 7 巻、115 頁。
- 35 Гоголь Н.В. Собрание сочинений в 7 томах. Т.2. М.,1976.С.324.
- 36 『ゴーゴリ 14 巻全集』第 2 巻、300 頁。ただしこの箇所は検閲に引っかかり、削除された。
- 37 「我が国の教会および僧侶階級について数言」（『友人との往復書簡抜萃』所収—『ゴーゴリ 14 巻全集』第 8 巻、71 頁）。
- 38 『ゴーゴリ 14 巻全集』第 1 巻、266 頁。
- 39 同上。
- 40 同上、136 頁。
- 41 同上、48 頁。
- 42 同上、102 頁。
- 43 同上。
- 44 同上、77 頁。—35 年版では、「ユダヤ人たちは教会を居酒屋のように賃借しているんだ」（同上、308 頁）。
- 45 同上、334 頁。
- 46 『ゴーゴリ 14 巻全集』第 2 巻、150 頁。
- 47 同上、74 頁。
- 48 同上、111 頁。
- 49 ヴァイスコプフの指摘するとおり、42 年版のコサックたちの友愛（「盟友の信義」とは「終末論的解放への熱情にとりつかれた死の友愛」である（Вайскопф М. Сюжет Гоголя. С.450）。
- 50 『ゴーゴリ 14 巻全集』第 8 巻、368 頁。
- 51 42 年版の戦闘場面では、叙事詩的な語りを通して、死を賭して故国のために戦うコサックたちの姿を力強く描き出し、その勇敢さを称えている。例えば次のように—「彼[ボヴデューク]の老いた心臓の真下に弾丸が命中したが、老人は全霊をふりしぼってこう言った。『(…)神よ、すべての者にこのような最期を与えたまえ！ ロシアの大地が永遠に栄えんことを！』こうして、ボヴデュークの魂は、はるか昔にこの世を去った老コサックたちに、ロシアの大地でコサックたちがいかに戦うことができるか、さらにそれにもまして、彼らが神聖な信仰のために死に赴くことができるかを物語るために、天上へと飛び去っていった」（『ゴーゴリ 14 巻全集』第 2 巻、139-140 頁）。